

論文題目 「明治・大正・昭和初期の検定済高等女学校用家事教科書にみる  
日本の台所の近代化に関する研究」

氏 名 須 崎 文 代  
学 位 博 士 (工 学)  
授与年月日 2014 年 3 月 19 日

### 【論文要旨】

日本の住宅の近代化過程において、最も大きく変化したもののひとつに台所が挙げられる。台所は家事労働の中心的な場であり、近代以前の場合は特に住宅の北側に配置されることが多く、暗い空間で主婦や女中が床上に<sup>まないた</sup>俎板を置いて作業をする<sup>つくぼい</sup>蹲踞式が主流であった。その後、明治・大正・昭和初期を通して展開された台所改良では、生活改善同盟会が台所改良を生活改善の目標のひとつに掲げ、住宅専門雑誌や婦人雑誌等も台所関連記事を盛んに取り上げて台所特集号を発刊するなど、当時の生活改善運動や住宅改良において最も重視された点のひとつであった。また、台所の改良過程では、近代的インフラ技術の導入や台所設備の改良とそれらの配置計画が模索され、現代のシステムキッチンへと変化したと考えられる。

戦前期の日本における台所の近代化については、これまで住宅史研究において着目され、基本的な変化の方向性や立働式導入による変化の重要性などは指摘されながらも、具体的な動向は明らかにされてこなかった。本研究は、こうした明治期以降の近代化における住宅用台所の変遷過程とその背景を明らかにするものである。とりわけ、変遷に関わった理念と形態的变化との関係に着目して明らかにすることを試みた。

当時の住宅改良に関する議論は、建築分野のみならず、家政学の分野で早くから展開されていた。そのため、家政関係資料には、当時の住まいのあり方に関する様々な事柄が扱われており、台所についても当時の様子や改良についての議論などが記されている。とりわけ女子教育で直接使用された「家事教科書」は、台所のあり方に関する記述が戦前期を通して継続的に蓄積されており、台所の変遷を検討する上で最も適当な史料と言える。そこで本研究では、明治・大正・昭和初期における検定済高等女学校用家事教科書（文部省発行『検定済教科用図書表』所載のもの）全 129 冊について、全国図書館および古書収集等による悉皆的所蔵調査の上で収集し得た計 103 冊を分析史料とした。本論では、この史料が

ら台所に関する記述や図版を全て抽出し、それをもとに台所に関する理論や台所空間・調理設備の形態的变化を分析し、住宅用台所の近代化過程における変遷の動向や、日本における台所の近代化の特質について検討を行ったものである。

本論文は序論、本論、結論からなり、本論は5章で構成されている。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、まず、研究史料としての検定済高等女学校用家事教科書における台所の位置づけと台所関連記述の主題について検討した。その結果、戦前期の台所に関する考え方には「衛生」と「利便」という二つの理念が骨子となっていたことが明らかとなった。また、「立働式」という台所における新しい作業形式の導入は、戦前期に展開された台所改良で常に扱われた主題であり、近代的台所の前提条件として扱われていた。その意味で、「立働式」の導入は台所空間や設備形態の変化に直接影響を与えた重要な動向であり、これも戦前期の台所改良の骨子のひとつとして位置づけられることが明らかとなった。

以下、第2章から第4章の各章において、これらの三点に着目し、理念の展開とそれに伴う形態の変化に着目して、台所の変遷過程を検討した。

第2章では「立働式」の導入過程とそれに伴う調理設備の高さの変化について検討した。「立働式」という台所における新しい作業形式の導入は、既往の近代住宅史研究においてその重要性が着目されながらも、具体的な動向が明らかにされてこなかった課題であった。本研究では前章における分析の結果から、台所空間や設備の形態の変化に直接影響を与えた重要な動向として注目された。そこで、史料中の台所に関する文章記述および掲載図版について、「立働式」の導入と展開に着目して動向の分析を行った結果、まず明治42年に初めて「立働式」に関する記述が見られたものの、この段階では概念的で具体性に乏しい扱いであり、台所改良の主要なテーマとしての象徴的位置づけに止まっていたことが明らかとなった。その後、大正末以降における能率論の導入が重要な転機となり、昭和初期には流し台・調理台・火器台などの作業面の高さ寸法や設備相互で作業面の高さを一致させる工夫など、具体的な形態の改変へと急速かつ多様な展開が見られる様子が明らかとなった。

第3章では、台所の「衛生」に関する記述の動向に着目し、当時の「衛生」についての考え方や扱われた項目の変化について検討し、さらに「衛生」に纏わる形態的变化として、採光・通風のための方策と床・壁・天井および流し周り・火器周りの材料の変化を検討した。

その結果、明治30年代以降から採光、換気、位置等の「衛生」に関する記述が見られ始め、明治末以降には耐水耐火や食品保存の方法などと扱う内容の拡大が見られること、これらの項目はその後戦前期を通して扱われ続けたものであったことが明らかとなった。

また衛生面を改善するための具体的方策としては、まず採光・換気方法が重視されている点に着

目された。そこで、この点について動向を分析した結果、明治末から大正期にかけては「天窗」「引窓」が普及し、昭和初期以降は外部に面した開口部からの採光・換気を基本として、回転窓、フード、排気筒等の局所的排気装置を用いるという考え方が普及していたことが明らかとなった。

台所の位置は、明治中期から大正期は、採光・換気等の〔衛生〕を主目的として記述されたものの、具体的な方位の扱いは殆ど見られない段階であった。その後、大正末頃から昭和初期には採光、換気の方法やその必要性についての考えが浸透するなかで、南・東南・東向を基本とした具体的な方位に関する考え方が示され始め、また、採光は北・北東向を適切と捉える記述が散見される傾向が見られることが明らかとなった。

台所の床・壁・天井および流し周り・火器周りの仕上げ材料に関する考え方は、総じて清潔さや掃除の便、耐水・耐火といった衛生面の向上を主眼として、大正中頃までの段階では、床材を板間・土間（敲土）、流し周りを亜鉛（トタン）張、火器周りを鉄・ブリキ等の金属板張とする記述が中心であり、これらの仕上がが耐水・耐火を比較的容易に実現する方法として認識されていたと捉えられた。その後、流し周り及び火器周りを中心として、大正末から昭和初期にかけてタイル、人造石、コンクリートといった新材料に関する記述が見られ、昭和初頭以降には床・腰壁についても同様の材料の扱いが活発化する傾向が認められた。この傾向は、特に1928（S3）年以降を中心として見られ、この時期において積極的に新材料の導入が図られたと考えられることを指摘した。

第4章では、台所の変化に関わったもう一つの理念である〔利便〕に関する動向に着目し、〔利便〕という概念の捉えられ方の変化や、〔利便〕に関わる台所設備の形態や平面計画の変化として、台所と隣接室との配置関係、台所の広さおよび土間の変遷、台所設備の集約化・一体化の過程について検討を行った。

すなわち、〔利便〕に関する記述内容は、明治中期から後期の段階では、整頓・収納や他室との位置関係に限られ、明治末以降になって〔立働式〕の導入や台所の広さ等が扱われ始めたことが明らかとなった。そして大正中期から昭和初期には労働軽減のための設備配置や平面計画に関する考え方が展開された動向が明らかとなった。

台所を中心とした隣接室との配置関係の考え方は、明治期から大正期は、玄関や座敷との非近接性が主張され、住まいにおける接客本位を重視する傾向が影響していた段階と捉えられた。その後、大正中頃を境に、配膳行為の合理化を目的として茶の間・食事室との隣接性を重視されるよう変化したことが明らかとなり、これは当時主張されていた住宅改良における家族本位への転換の影響が考えられることを指摘した。一方、家事教科書所載の住宅平面図をもとに台所と隣接室との配置関係を分析した結果、浴室を隣接配置する平面形式は明治中期の図面から見られ、大正期以降の水周りの集約化を示す動向が認められる一方で、前近代の台所でも湯（熱源と水）を必要とする空間として、台所と浴室を隣接または近接配置する考え方が慣習的に存在していたことを示し、また、「台

所一茶の間・食事室」、「台所一浴室」という隣接形式の図式は、戦後に議論されるLD-Kの関係性や、コアシステムのような水周りの集約化におけるキッチンバス・トイレの関係性を示唆するものとも捉えられることを指摘した。

台所の広さについては、大正後期から利便性を意識した設備配置が主張され、土間作業を廃して床上作業へと統一する考え方が展開され、無駄な広さを廃してよりコンパクトに計画し、土間を縮小して勝手口、あるいは浴室の焚口と兼用するよう変化したことが明らかとなった。

台所設備の集約化・一体化については、大正中期に諸設備の集約配置を示す記述が見られ始め、大正末期から昭和初期には諸設備の一体化傾向が継続的に見られる傾向が明らかとなった。この諸設備の集約化・一体化の傾向は、具体的には主要な設備を一列に並べるI型の配列型を中心に、平面形式としては外壁面にI型の集約配置をとる型に収斂していくことが明らかとなった。また、こうした配列型や平面形式は、戦後も定着し続けた型であり、戦前期にほぼ完成された形式のものであったことを指摘した。

最後に、第5章では、各章で明らかにした動向を総合して、日本における台所の近代化の史的特質を検討した。

すなわち、家事教科書に見られる日本における台所の近代化の動向として、最初に、明治期から大正初期にかけて採光、通風や排水などの室内環境衛生や食品衛生等の「衛生」に比重が置かれて進められた背景として、日本の気候風土をもとにした独自の台所の模索過程と捉えられることを指摘した。また、「利便」については、大正中期頃から、慣習的な「便利さ」とは明らかに異なる、より高度な水準の合理性を主眼とした考え方が展開され、台所論は「利便」に比重を置いて論じられるものへと変化し、とりわけ合理的・科学的な考え方の反映として能率論が展開されたことにより、台所形態が大きく変化したと考えられることを指摘した。「立働式」についても、その導入による台所形態の近代化過程は日本特有のものであり、「立働式」は家庭生活における洋風化の象徴であった一方で、台所が裏方の労働空間であったが故に能率性が偏重され、建築や住宅の近代化過程に見られるような洋風意匠の導入は重視されなかったことを指摘した。

また、台所の近代化過程に関しては、「衛生」、「利便」という現実的かつ技術的な側面に眼目が置かれ、「洋風化」は立働式や先進的技術の導入に表徴されていたものの、意匠のレベルでは殆ど扱われず、能率論を中心とした合理化・科学化の模索が他の諸室に比べて飛躍的に進展したことを指摘した。さらに、台所の形態的变化に見られた(i) 所一茶の間・食事室、台所一浴室という隣接形式、(ii) 土間から床上への作業場所の統一、(iii) 諸設備の一体化、(iv) 外壁面へのI型配置という平面形式への収斂は、日本の気候風土からくる独自の衛生観や住宅の狭小性を背景としながら、世界的に見ても極めて完成度の高い型を形成していたことが明らかとなった。そして、戦前期の日本において完成したこのような台所形態は、戦後に普及した台所形態の素地を形成していたことを指摘した。

そして最後に、本研究では以上の台所の変遷の動向を総合し、明治中期から後期を、台所のあり方として〔衛生〕や〔利便〕に関する考え方が扱われ始めた「萌芽期」、明治末期から大正中期を、扱われる項目の多様化や具体的な改良の方策が展開された「模索期」、そして、大正後期から昭和初期を、具体的な改良方策の普及や一定の台所形態への収斂が見られた「発展期」とし、この三段階に時代区分できることを提案した。この時代区分は、台所史の動向を捉える上で重要な指標と考えられ、また住宅史、生活史などを考察する上でも意義深い指標のひとつとなると考えられるものである。